末黒野

すぐろの

12月号（通巻784号）

末黒野　平成二十三年十二月五日発行　第六十六巻第十二号（通巻七八四号）

初鵙

小川玉泉

江の島へ橋の半ばの大夕立

穂芒や錆浮き出づる待避線

秋空をわが物顔に島の鳶

枝先に明日咲く構へ酔芙蓉

一遍の像へ秋暑の杖を引く

野の川にこぼれては萩とどまらず

喫茶店出で秋光に眼を射らる

紅葉せず散り潮痛みせる楓

曇る日の声の短くつくつくし

台風に耐へたる紫苑咲きにけり

初鵙や青ひと色の今朝の空

高空を目指さず群るる秋茜

月まどか

松本三千夫

畑隅の捨て猫車ねこじやらし
水嵩増す湖へは出でず秋の蝶
夕日濃き棚田の裾や曼珠沙華
虫すだく漁家の灯低くこぼれをり
匂ふほど濃き影落とし月の道
卓はさみ妻と二人や虫の夜
別れ来し口乾きをり秋の暮
灯台の真上を海へ鰯雲
矢のごとき望郷の念うろこ雲
上り下り同時発車や鶏頭花
終電の音遠ざかる月まどか
江ノ電を掠めて低し秋つばめ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

山霧

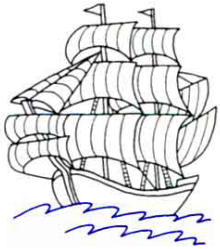
黒滝志麻子

人波に呑まれ別るる夜の秋
初鴨の滑りて池の広さかな
稲妻の照らし出したる樹相かな
露草の瑠璃の繁りに美術館
足元に湧く霧を抜け伊吹山
人影の消えては現るる山の霧
山肌の湿りを抱き沢桔梗
櫓の音のかすかに聞こゆ星祭
秋澄むやワイン試飲のひと日旅
　悼　渡辺義子さん
瑕瑾なき今宵の月の別れとは

鵙のこゑ

田中臥石

荒海や二百十日の玻璃戸鳴る
颱風や上総低山雨越さず
荒波や師の忌重なる九月来ぬ
友泊りゐて秋の夜の郷の酒
風遊ぶ上総鶴舞蟬しぐれ
歩けとは生きよの言葉鵙のこゑ
瞭らかに秋風鶴舞城趾径
胃癌とは違ふと思ふ秋刀魚焼く
胃カメラの映す潰瘍秋風裡
三文経誦しをり秋の彼岸僧



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

蜩　城戸緑

秋暑し薬草吊す深庇
かなかなの鳴きつぐ病舎午前五時
蜩や曾つて夫との山に泊つ
あきあかね湧く山頂やケルン積む
杜を抜け声の遠のく法師蟬
軒連ねいづれも元祖走り蕎麦
夕茜サイロにとどめ牧閉ざす

いぼむしり　熊切光子

みんみんの声発条のゆるぶごと
だしぬけに篠突く雨や法師蟬
隠沼に日矢射込みたり葛の花
火の神にともす艀や秋簾
燕去ぬ昼月いよよ透明に
だんまりを決めこみ玻璃のいぼむしり
窓ひとつ点る校舎やちちろ虫

遠筑波　堺昌子

土用波風はらむ帆の白々と
意のままの鋏使ひや松手入れ
ふる里の大字小字葛の花
秋耕の土の匂や遠筑波
どの道も海へとつづき緋のカンナ
初舞台のリズム体操秋暑し
碧空や里の峠の栗笑まふ

秋まつり　鈴木一三

焙烙に苧殻を焚くや遺されて
鎌を研ぐ砥石の癖や鉦叩
熨斗つけて寄進の酒や秋まつり
千生りの瓢に夕日容赦なし
ランドマークタワーを跨ぎ秋の虹
尖端を研いで試すや木の実独楽
能舞台の静寂劈く鵙の声

里祭　西川みほ

蟬しぐれ鴉声と競ふ直の声
手繰り得ぬ夫と覚ゆる流れ星
処暑の日の一句添へたる旅信かな
ひぐらしと鳥語沁み入る山湖かな
空蟬の爪の食ひ込み御神木
決め事の手順の狂ふ残暑かな
有線放送辻に流るる里祭

秋の蟬　松田泰子

初盆の青き畳でありにけり
遠い木や近い木秋の蟬沁みて
拾はむとするや鳴きたる秋の蟬
亡き人に話及びぬ鉦叩
おとうとは今もおとうと雁渡る
山風は山にかへりぬとろろ汁
走り蕎麦田舎にもある予約席

青炎集

小川玉泉選

横浜　稲垣佳子

石舞台時には越えて夏の蝶
古里や秋を炊き込む自在鍋
雨の止み俄かに虫の宿となり
枝の先かはるがはるの赤蜻蛉
メタセコイア仰ぎてよりの秋思かな
忠魂碑もみづる蔦の絡まりて

横浜　内藤庫江

盆の月仏へ窓を開けにけり
山門をくぐり紅濃き秋茜
秋霖や仏足石の洗はれて
赤とんぼ群れて鎌倉文学館
溝蕎麦の花隠沼を明るうす
潮騒の葉山海岸鰯雲

横浜　立野千鶴子

校庭の朝森閑と白木槿
川底に揺らぐ小石や秋澄めり
縁に座し夫の遺影と月今宵
旧仮名の考の句帖や夜の長く
栗を剥く夜の静寂や妣のこと
一族の長と卒寿や菊の宴

横浜　小林一榮

稲妻の能面よぎる刹那かな
鈴虫の間を置く闇の深さかな
戦友の話のつきず敬老日
妻留守の厨にすだく昼の虫
一顆なきままや我が家の柿の秋
一向に慣れぬ補聴器そぞろ寒

横浜　鈴木加代子

凛として赤富士雲を寄せつけず
透きとほる翅おもむろに蟬生るる
寺守る大樹や紅き百日紅
蜉蝣や風呂場に影を落し去る
木から木へがんじがらめや葛の花
秋海棠いんこの墓を覆ひけり

宮城　男澤榮男

蓮浄土空の蒼さを深めけり
敬老日待つ人もなく夕餉済む
墓石をもとへ戻して秋彼岸
セシウムの騒ぎ終へしや秋の空
寝待月ほのかに曇の切れ間より
稔田に雨風強し腕をくむ

横浜　山崎稔子

てふてふと幼の指せる大花火
濯ぎもの満艦飾や夏惜しむ
蜩の声の高々人を待つ
稲妻の走り待ち人現れず
堀に沿ひ松本城の松手入れ
手に残る香り清しく新松子

横浜　戸田澄子

身に入むや夫の遺せし車椅子
出棺の夫に手向けや秋しぐれ
亡き夫の文読み返す夜長かな
亡き夫の声は空耳虫しぐれ
夫逝きて色なき風の中にかな
闘病の夫の晩年秋の蟬

横浜　早川八重子

水打ちて打ちて庭石鎮めけり
夜店の灯童話の世界生まれをり
青柿をあまた落しぬ昨夜の雨
笹百合の暮れ残りたる白さかな
オカリナの音の吸ひ込まる虫の闇
ポンプ井の水のゆたかに終戦日

千葉　内山タエ

切せつと蛙を鳴かせ秋の蛇
新涼や踊り稽古の裾さばき
前掛で汗を拭へり敗戦忌
低く干す野良着に萩の風渡る
露草や鎌研ぎ澄ます外流し
新涼や箒目さやに屋敷神

巨林抄

重陽や町内一の高齢に　三谷ゑい

父の倍生きて流離の寝待月　宮地静雄

虫の声部屋は大きな原となり　沼﨑千枝

蟷螂の深淵めける眼かな　鈴木鞠子

名月をぐいと飲み干す茶碗酒　北郷和顔

草の名を拾ひ分け入る花野かな　正谷民夫

大雪渓雲の乗り行く白馬岳　今野明子

股鍬のざくと芋掘るわらしかな　都留百太郎

蕎麦咲くや仰ぐ農場解放碑　今村千年

舟入れて船屋の眠る秋の潮　細島孝子

名月や絵本のうさぎ餅をつき　和泉道草

八月や卒塔婆を走る僧の筆　百瀬真山